遊戯王―saki―

融合呪印生物・神

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

２１世紀

世界のデュエリスト人口は数億人を超えプロデュエリストは人々の注目を集めていた

高校でも大規模な全国大会が毎年開催され、そこではプロに直結する成績を残すべく高校生デュエル部員たちが覇を競っていた

これはその頂点を目指す決闘者たちの軌跡

※これは咲を舞台とした遊戯王ｓｓです。麻雀要素は無く、従って闘牌描写もありま

せん。能力は各キャラクターのデッキ傾向やデュエル用の特殊能力として用いられます。

目次

プロローグ／撃滅のＬ・Ｇ・Ｄ ―― 1
第１話／不屈の戦士 ―――― 28
第２話／燃え上がる覇者 ―――― 53

プロローグ／撃滅のＬ・Ｇ・Ｄ

歓声、熱狂、興奮。

そのスタジアムには、全てがあった。

「俺の、ターン！」

宣言と同時、キングはデュエルディスクに装着されているデッキからカードをドローする。そして手札に加えるとそのまま流れるようにスタンバイフェイズへと移行する。

「スタンバイ！自分フィールドに魔法・罠カードが存在しないことにより、墓地からこのモンスターを特殊召喚できる！今再び復活せよ、『黄泉ガエル』！」

本来魔法・罠カードが配置されるであろう位置に水の波紋が広がり、そこから影が飛び出てくる。

見ればそれは、小さな翼と光輪を携えた黄色の蛙である黄泉ガエル。魔法・罠ゾーンを縦横無尽に駆け回り、最終的に最初から居たアロマポットの隣、自分のあるべき場所に着地した。

「更に！手札の『ドットスケーパー』を捨て、魔法カード『ワン・フォー・ワン』を発動！」

手札のドットスケーパーを墓地へと差し込み、叩きつけるかのような勢いで魔法・罠ゾーンに魔法カードを置いた。
「このカードは手札のモンスターを1枚捨てることで発動でき、デッキからレベル1モンスターを1体特殊召喚できる!」
「現れろ!『ミスティック・パイパー』!」
フィールドにショートしたかのように稲妻をバチバチと纏うドットスケーパーが出現し、その体からデータ状のものが放出されていく。
そして放出されたデータが上空に集まり再構築された頃には、そこには小太りな奇術師とも魔術師とも見分けのつかない、その実演奏家である男性が存在していた。
「そして今捨てた『ドットスケーパー』の効果発動!デュエル中に1度だけ、このカードが墓地へと送られた時、特殊召喚できる!蘇れ、ドットスケーパー!」
ミスティック・パイパーがその手に持ったフルートを吹くと、ショートし沈黙しているドットスケーパーに向かい光の奔流のようなものが放たれる。
そして稲妻や煤はだんだんとその姿を消していき、影も形も見えなくなった頃にはその機能を復活させたドットスケーパーが残った。
「ミスティック・パイパーの効果発動!このカードをリリースすることで、デッキからカードを1枚ドロー!」

ミスティック・パイパーが自身の役目を終えたかのように一礼して強く笛を吹くと同時、ポンッと音を立てて消え去り、そこには1枚のカードが残る。
キングはそれを手に取り、皆に見えるように高々と掲げた。
「そしてそのカードがレベル1モンスターだった場合、追加で1枚ドローできる！」
「俺が引いたのは、レベル1モンスター『ダークロン』！更に1枚ドローする！」
掲げたカードから、金髪に隠れて目の見えない2頭身の奇妙な生き物が出現しキングへと近づく。
キングがデュエルディスクを装着した手をダークロンへ向けて差し出すと、ダークロンは恭しく片膝をつきカードを1枚抜き出してキングへと差し出した。
キングがそのカードを受け取ると、間も無くその姿は掻き消える。
「…フッ。俺は今引き当てた魔法カード、『ワンチャン!?』を発動！」
「このカードはフィールドにレベル1モンスターが存在する場合に発動でき、デッキからレベル1モンスター1体を手札に加えることができる。」
「俺はこの効果で『金華猫』を手札に！」
フィールドに犬のようなものが出現し何かを探し回るかのように周囲を駆け回ると、やがてその尾がキングのデッキをはたき1枚のカードをキングの手札へと加えさせた。
「ただし、このターンに金華猫を召喚できなかった場合、エンドフェイズに２０００のダ

メージを受けることになる。」
「だが、王者には関係の無い話だ！俺は手札に加えた金華猫を召喚！」
フィールドに白い小さな子猫が現れ…しかしその全貌を見たものは、その子猫ではなくその影に潜む刺々しく巨大な怪猫こそがその本質であると理解しただろう。
「金華猫が召喚に成功した時、墓地からレベル1モンスターを1体特殊召喚する！再燃せよ、『ガード・オブ・フレムベル』！」
そして子猫の影はやがて姿を変え、墓地に存在する炎を纏った龍へと変貌する。
「…そして、俺の場には既に前のターンお前が破壊し損ねた『アロマポット』がいる。」
展開の合間、物言わぬポッドはただ嗅ぐものの気持ちを落ち着かせる香りを放ち続けるのみ。
「手札2枚とモンスター一体から、場の全てが…モンスターで埋まった…！これが、キング…！」
対峙する挑戦者は、その光景に―全てがレベル1の低ステータスとはいえ―息を呑み、キングの実力を実感する。
「ああ。そしてこれで、俺のフィールドには風・水・炎・地・闇の5つの属性を持ったレベル1モンスターが揃ったわけだ。」
その言葉を聞いた時、挑戦者は理解する。

キングをキングたらしめんとする象徴。彼の持つ絶対のエースがこの場に現れようとしているのだと。

しかし、彼のデッキは高打点に特化したパワーデッキ。それを阻止する術など、少なくとも今の手札には存在しない。

「認めよう、お前は紛れもなく素晴らしい決闘者（デュエリスト）だ！だが俺は決闘王（デュエルキング）！お前の更にその先を行く！」

宣言したキングは、中央が吹き抜けたスタジアムの空へと顔を向け、手を翳した。

「行くぞ！現れ出でよ！我が覇道を照らすサーキット！」

キングの翳した手の先から光が放たれ、遥かな空に街ひとつ飲み込まんとする超巨大なリンク召喚のためのシステム―サーキットが出現する。

「アローヘッド確認！召喚条件はモンスター５体！」

「俺は、光以外の異なる属性を持った五体のモンスターをリンクマーカーにセット！サーキットコンバイン！」

五体のモンスターが、それぞれ茶、青、緑、赤、黒の５色の光龍となり、サーキットの下半分全ての矢印―アローヘッドへと吸収されリンクマーカーへと変える。

左、左下、下、右下、右の５つがリンクマーカーへと姿を変え、全ての準備が完了した。

「見せてやろう、俺が王者である証を！これこそが、俺が従える最強神！万物はかの龍の前に跪くのみ！」

巨大なサーキットがバチバチと稲妻を走らせ、その輝きを増していく。

そして目も眩まんばかりの激しい閃光の中に、いつの間にかその龍は天に我が物とばかりに居座っていた。

「降臨せよ！リンク5！L・G・D（リンク・ゴッド・ドラゴン）！」

召喚が完了するや否や余りにも巨大な咆哮と共にビリビリとした威圧がそれを知覚した全てを襲う。

それは通常のモンスターでは成し得ない、まさに神の領域であった。

「L・G・D（リンク・ゴッド・ドラゴン）が光属性以外全ての異なる属性を持ったモンスターを素材としてリンク召喚に成功した時！相手フィールドの全てを、破壊する！」

L・G・D（リンク・ゴッド・ドラゴン）の体から不定形のオーラが放たれ始め、ついには質量すら持つほどの密度へと達する。

「裁き（ファイナル・ゴッド・デストラクション）の一撃！」

そのままオーラが全て解き放たれ、挑戦者のフィールドのエースモンスターから永続魔法、伏せカードまでを木端微塵に打ち砕いていく。

いや、押しつぶされるといった表現のほうが相応しいだろうか。その後には何一つと

して残らなかった。

「これで、お前の場はガラ空き。そして俺の場には攻撃力５０００のＬ・Ｇ・Ｄ（リンク・ゴッド・ドラゴン）がいる。」

知ってはいても、そのあまりの光景に呆然と立ち尽くしていた挑戦者だったが、その言葉に正気を取り戻し可能性を模索し始める。

しかし、彼にもはや打つ手はなく、終わりの時を待つのみであった。

「では終幕といこう！Ｌ・Ｇ・Ｄ（リンク・ゴッド・ドラゴン）の攻撃！」

「破滅（レガシー・ジェネシス・ドミネーション）の一撃！」

５つの龍口が１箇所に集まり、１つの巨大な光球を作り出す。それは５つの力と５００００もの威力を秘めた究極の一撃。耐えられるものなど存在しない。

やがてその光球からブレスのように光の奔流が放射され――残ったのは衝撃に倒れ伏す決闘者の姿のみだった。

瞬間、試合終了のブザーが鳴り響き、莫大な歓声がスタジアムを包む。

『し、試合終了――！息つく間も無い怒涛の連続展開の果てに勝利を手にしたのは、現高校生決闘王（デュエルキング）、逆巻（さかまき）　遊陣（ゆうじん）――！』

『いやぁ素晴らしいデュエルでしたね。たった手札２枚から異なる属性五体での切り札召喚とはまた…、確か見られたのは今回が初ではありませんか？』

『た、確かに！これはなんという事だー！・まだ決闘王（デュエルキング）は手の内を見せきっていないということなのかー!?』

『低ステータスながらも少ない手札からあれだけのサポートを使いこなして難しい発動条件を満たす。並大抵の決闘者（デュエリスト）ではできませんよ。』

解説と実況の賞賛の声に特に反応もなく、堂々とした態度で付けたマイクに向け大きな声を張り上げる。

「見たか！・王者の決闘を！・真の王者とは、如何なるデッキすらも操り、圧倒的な力で持って敵を打ち砕く者を言う！」

その覇気溢れるセリフに、熱狂と歓声が一際大きくなる。

だが彼は気にした様子もなく、倒れ伏した状態から起き上がろうとする挑戦者の手をとり、起き上がらせた。

そしてその手を高々と掲げさせると、観客へ向け言う。

「…そして、王者に挑み一時と言え追い詰めて見せたチャレンジャーに今１度盛大な拍手と喝采を！・彼は将来素晴らしい決闘者として大成するだろう！・この決闘王が保証しよう！」

今度こそ決闘者に向け紛れもない賞賛と感嘆の意を多分に含んだそれらが贈られる。

本人もどこか気恥しいながらも嬉しそうだ。

ふと、キングがマイクを切り、しかししっかりとした声量で彼に告げる。
「いいデュエルだった。またやろう、チャレンジャー」
嬉しそうに頷く挑戦者に笑みを見せると、再びマイクをオンにして観客へと向けた。
「では諸君！次の舞台でまた会おう！」
言うや否や、踵を返し入場してきた専用ゲートへと姿を消していくキング。
その日、解散と終了のアナウンスが鳴ってからも彼らの興奮が冷めることは無かった。

さて、そして退場した後のキングこと逆巻（さかまき）　遊陣（ゆうじん）だが。
「――――つっかれたぁー…」
「お疲れ、甘いもの食べる？」
「あー…蜂蜜キャンディでお願い」
「わかった」
控え室に入るや否や高校生決闘者インターハイチャンピオンに蜂蜜キャンディをもらい、口に放り込んでソファに沈み込むというキャラ崩壊っぷりを見せつけていた。

「――しかし凄かったじゃないか遊陣、あの土壇場で手札2枚とモンスター一体から完全なＬ・Ｇ・Ｄまで出すとは。さすがの私も舌を巻いたよ」
「それは違う。実は最初からユージンはあの一瞬を狙っていた」
「何？」
「例えば先行1ターン、ユージンは予想ＧＵＹでガード・オブ・フレムベルを呼び出しておろかな埋葬で黄泉ガエルを墓地に送った。この時点でユージンのデッキの中で場に出しにくい炎と水を出しやすいように調整している」
「だが、どちらも優秀なモンスターじゃないか。何も不思議は無いはずだが？」
　その指摘にインターハイチャンピオン――宮永照は首を横に振る。
「ユージンが直ぐに勝負を決めるつもりならここで墓地に落とすのは黄泉ガエルではなくジェット・シンクロン。手札の配置や推移を見るに、手札には初めからドットスケーパーが握られていた。この時点で多少の長期戦を覚悟の上で黄泉ガエルを墓地に落としに行ってたことがわかる」
　ふむ、と口元を抑え考え込む少女――弘世菫は、様々な思考を重ねたらしく、やがて口を開いた。
「つまり…本気で戦っていたわけではない、と？」
「本気だったよ。でも、キングのデュエルが一瞬で終わってしまったらつまらないん

だって」

　ソファに沈んだまま口の中でコロコロと飴玉を転がしながら遊陣は応える。

「もちろん、今年のインターハイや後々を考えてメタされないために全力を伏せるって意図もあるさ。でもそれ以上にキングには『キングらしさ』が求められる」

「キングらしさ…?」

「エンターテインメント、と言い替えてもいい」

　それだけ言ってさらに疲れたように黙り込んだ遊陣に代わって照が続ける。

「スポンサーや主催者からすれば、試合が一瞬で終わってしまうのも、山も谷もない展開も望ましいものじゃない。意図的にピンチを演出して、巨大な力で逆転勝利というのも必要」

「まあ、今回のチャレンジャーが強い決闘者だったと言うのは嘘じゃない。あのままプロになれば、上位に食いこめるレベルにまで育つだろう。それに…」

「折角俺に挑んできてくれたんだ。だったらエースで迎えてやるのが、礼儀というものだろう?」

「ユージン、またキング口調になってる」

「ごめん、だんだん癖になり始めてて…」

クスクス笑う照に困ったようにそう言うと、やがて大振りな動きで勢いをつけてソファから一息に立ち上がる。
「…よし！じゃあデュエルも終わったし、帰ろうか。どこかカードショップでも寄ろう」
「そうだな、私のデッキ調整にもぜひ付き合ってもらいたい」
「菫のデッキはエースが厄介だから対策しなくちゃ…」
「そういう照こそ、攻撃反応だの打点コピーだのかなり厄介な構築じゃないか」
「それくらいでないと高校生の頂点には立てない」
「違いない」
笑いながら帰り支度を始める３人。
その姿は世間的に知られる王者達のそれとは明らかにかけはなれた、普通の学生のものだった。

１：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２０：４８：００　ＩＤ：ｉＱＶｐｌｐｗＧＭ
【速報】キング、再びＬ・Ｇ・Ｄをリンク召喚する【Ｌ・Ｇ・Ｄ】

２：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２０：４８：３４　ＩＤ：９ＤｄｉｔＣＬｘｊ
知ってた定期

３：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２０：４９：０５　ＩＤ：ｆＫＶｔＧＧＯｐｖ
場１枚と手札２枚からＬ・Ｇ・Ｄの効果条件を満たすキングには参るね…

４：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２０：４９：３９　ＩＤ：ｌＩｉＫＪｌＬ３ｅ
引きが強すぎる

５：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２０：５０：１３　ＩＤ：ｑ９＋ｕｖｅＡＪＪ
＞＞４　だって当然だろ？キングなら

６：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２０：５０：４４　ＩＤ：

ＭｇｕＭＡ２ｇｕＢ
　アロマポットを処理しきれなかった挑戦者が悪い

７：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２０：５１：１６　ＩＤ：ｒｄＪＶ／ｂＹＡｎ
　おかしい…レベル１モンスターは大した力もない単なる観賞用のカードだったはず…

８：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２０：５１：５０　ＩＤ：ｐ／２ｋ０ｒｄＳＶ
　＞＞７　あまりにもキングがガン回しするものでレベル１を組み始めた初心者もいるほどです

９：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２０：５２：２３　ＩＤ：ＨｚｍｂｍＳＬｆＺ
　＞＞８　キング効果でレベル１軸のエースモンスターが高騰しまくってる現状で無茶すぎる…

１０：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２０：５２：５４　ＩＤ：ＬｙＩｊ９Ｅ１ＹＤ
　見てくれよこのベビートラゴン！
（ＵＲＬ省略）

１１：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２０：５３：２６　ＩＤ：Ｆｈ２ＣｓｙＪＺｊ
＞＞１０　５００円台のベビートラゴン初めて見た

１２：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２０：５３：５９　ＩＤ：Ｇｅ８ＵＺａｎ３３
＞＞１０　森羅の姫芽宮が２０００円行ってやがる…

１３：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２０：５４：２９　ＩＤ：ｏｅ６ｈｃ３ＱＦ＋
＞＞１２　ゴーストリック・デュラハンとキキナガシ風鳥、シャイニート・マジシャ

ンなんてもうどこにも売ってないゾ

１４：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２０：５５：００　Ｉ
Ｄ：８２Ｈ２ＮＰｓｐＪ
　異常事態すぎる…

１５：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２０：５５：３１　Ｉ
Ｄ：３ＣＺａ８ｎＫＧ７
　ＬＬテーマが軒並みすごい値段しとるんですけど

１６：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２０：５６：０４　Ｉ
Ｄ：ＹＳ／ｊＢｐｇＸｚ
　キングがデッキに投入してるカテゴリ群ならそらそうよ

１７：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２０：５６：３４　Ｉ
Ｄ：ＦｑＦＬｐＡＪａｒ
　再録して、やくめでしょ

１８：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２０：５７：０４　ＩＤ：Ｍ３ｐ＋ｋＲＬｈＸ
噂では遊陣パック出るとか聞いたけどどうかな
１９：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２０：５７：３６　ＩＤ：Ｍ６ａ９ｚｖｖｚｔ
＞＞１８　まあ今までの歴代決闘王だってその都度出てたし出るでしょ
２０：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２０：５８：０８　ＩＤ：５ｖｔｏｄｄｋＬＵ
酷かったね、第１３代決闘王パック
２１：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２０：５８：４１　ＩＤ：ＦｘＮＥＪｉｒＩＷ
＞＞２０　俺はアルカナフォースの効果で正位置か逆位置かを決定する！当然正位…クソァ！

２２：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２０：５９：１５　ID：sVlu5tRwN

>>２０　凡人には使いこなせない究極のデッキだからな…

２３：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２０：５９：４５　ID：vRDo2／wyq

ふふふ…俺のレベル１デッキを見ろ…！

（ＵＲＬ省略）

２４：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２１：００：１７　ID：Sva2kU4Xl

>>２３　相変わらずダークロンがノイズすぎる…

なんでキングは使いこなしてんだよ！

２５：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２１：００：４９　ID：qKPXAzXHV

フィールドに並べたレベル１群をダークロンでレベル２にしてアーマーカッパーセイントレア！
これが効く！

２６：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２１：０１：２０　ＩＤ：７ＵｚｐｏＡＰＧｃ
頭おかしい…

２７：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２１：０１：５０　ＩＤ：６ｕｋ０ｊＪ４ａｃ
Ｌ・Ｇ・Ｄは…Ｌ・Ｇ・Ｄはどこなの…？

２８：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２１：０２：２０　ＩＤ：ＩｒＮｐ７８ｗｔＨ
＞＞２７　元々の数が少ないキングの最強エースなんてすぐ無くなるに決まってんじゃねぇか！

２９：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２１：０２：５４　ID：967ZRV8f6

>>28　（使いこなせない）

３０：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２１：０３：２４　ID：Vjdmpx0E/

>>28　おのれ転売ヤー…

３１：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２１：０３：５４　ID：+8Gwh9cNL

>>30　再録するまで待て、きっと決闘王パックで再録されるさ

３２：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２１：０４：２９　ID：H7C+PNwoi

>>31　（sophiaの影霊衣が再録されず阿鼻叫喚のスレ民）

３３：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２１：０５：０２　ID

Ｄ：ＬＣｆＭ６ＥＡＳｖ
　>>３２　コナミはさぁ…人の心がわからない人？

３４：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２１：０５：３４　ＩＤ：ＷＥｇＢｒＲ７６Ｍ
　とりあえず何がなんでも金華猫とミスティック・パイパーだけは再録してもらうぞ…

３５：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２１：０６：０７　ＩＤ：ｉＮｌＰＨｍ６６Ｌ
　我がデッキのニューエースを紹介しよう！
（ＵＲＬ省略）

３６：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２１：０６：４１　ＩＤ：３ｎＨＧＯｊＷＱＬ
　>>３５　時代の革命児来たな…

３７：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２１：０７：１２　Ｉ

D：9GyV2zYWe
>>35 （チューナー）

38：俺は魔法カード、名無しを発動！　20XX／4／14　21：07：46　I
D：VzDeqR6dd
>>35　相手ターンに、手札からモンスター効果だと!?

39：俺は魔法カード、名無しを発動！　20XX／4／14　21：08：19　I
D：WLhbk+dah
>>35　モンスター効果封じられてL・G・D突破できなかったあの挑戦者かわいそう…

40：俺は魔法カード、名無しを発動！　20XX／4／14　21：08：52　I
D：+iEyEyBfh
>>35　可愛いは正義だからな…

41：俺は魔法カード、名無しを発動！　20XX／4／14　21：09：25　I

Ｄ：５８ｓＣＧ０Ｗｆ９
　そういやこないだアキバのショップでキングとインハイチャンプがデュエルしてるの見たぞ

４２：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２１：１０：００　Ｉ
Ｄ：＋ａ２ｄｋＱＣｐＤ
　>>４１　あの二人と保護者はプライベートでも交流があるからな
　まえにデュエルしてるとこに遭遇して見せてもらったわ

４３：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２１：１０：３２　Ｉ
Ｄ：ｆ０＋ＥｐＢｋ７Ｊ
（ディメンション・リフレクター）

４４：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２１：１１：０３　Ｉ
Ｄ：ＳｚｍＢｇＱｓ５ｏ
（ものマネ幻想師）

45：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２１：１１：３４　ID：HSomgfH7o

（デビルズ・ミラー

46：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２１：１２：０５　ID：KGsNWPKPI

>>45　関係ねぇ！

47：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２１：１２：３９　ID：c9433Fu19

良いですよね対キング戦術を極めた結果インハイチャンプになった女

48：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２１：１３：１４　ID：iLjRla36／

強力なカード群に紛れてエース面してるデビルズ・ミラーはなんなの…

49：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２１：１３：４９　ID：

Ｄ：ＪＥＤＩ９ＡｋｊＰ
チャンプのお気に入りだし…何故かいつもリチュアル・ウェポンで３６００／３３００になるし…

５０：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２１：１４：１９　Ｉ
Ｄ：ＨＯＤｈｌｋｐｉ７
チャンプも大概頭おかしいからね、仕方ないね

５１：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２１：１４：５２　Ｉ
Ｄ：＋ＣＭｗＣｋＧｌＨ
やはりオカルト使いは決闘者にて最強…

５２：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２１：１５：２３　Ｉ
Ｄ：ｌＦＶ７ｃｒＧｂｆ
引きのおかしい決闘者は稀によくいる

５３：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２１：１５：５６　Ｉ

D：PuEDznkZy
永水女子とか龍門渕とか…

54：俺は魔法カード、名無しを発動！　20XX／4／14　21：16：27　ID：upbOvwxv／
>>53　オカ中のオカの名前を出すのはヤメロォ！

55：俺は魔法カード、名無しを発動！　20XX／4／14　21：17：01　ID：hmMwh7hRG
>>53　八咫ロックとエグゾ！八咫ロックとエグゾじゃないか！

56：俺は魔法カード、名無しを発動！　20XX／4／14　21：17：31　ID：8TUjzKpGV
>>55　ヤタロックは永久追放されたから…
代わりに八俣大蛇と火之迦具土使いますね^^

57：俺は魔法カード、名無しを発動！　20XX／4／14　21：18：06　I

Ｄ：ＶＩｄｋＤＡｔｚｂ
　＞＞５６　そういうとこやぞ
５８：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２１：１８：３８　Ｉ
Ｄ：ｏｄＶｐｋ５ｊＨｌ
　天江衣はなんなの…
　遅延戦法とドロー加速でエグゾ引当てるプロなの…
５９：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２１：１９：０８　Ｉ
Ｄ：／ＤｉＧＵＶ０１ｗ
　でもそのわりにいつも揃うのデッキボトムまで掘り進めてからですよね？
６０：俺は魔法カード、名無しを発動！　２０ＸＸ／４／１４　２１：１９：３９　Ｉ
Ｄ：ＬＪｄＨｔＯＨｋ９
　キングもその対抗手も異次元すぎる…

第1話／不屈の戦士

「やっべぇ！寝過ごしたぁ！」

朝。学校に在籍する学生であれば既に登校を終え、ＨＲを待つような時間帯。学生服で町中を必死に走る1人の青年がいた。

彼の名は須賀京太郎（すがきょうたろう）。何処にでもいる――というにはその明るい髪色は少々目立つが――平均的男子高校生である。

その目立つ金髪は地毛であり、染めて非行に走っている訳でもない、むしろ本人は理想的な好青年といったところである。

であれば何故こんな時間に彼がいるのか。本人が先程言っていた通り、寝坊であった。

彼とて多感な男子高校生。様々な流行り廃りや遊戯に対して興味を持ってしまうこともある。今回はそれが災いを招いた形となった。

「くっそー！デッキ構築にかまけて寝落ちさえしなければ！」

彼の嵌ってしまった新たな趣味。それは彼の右手に握ったままのデッキケースを見れば一目瞭然である。

そのケースには『ＫＯＮＡＭＩコーポレーション』、略称を『ＫＣ』の刻印が刻まれている。つまりは『デュエルモンスターズ』であった。

――デュエルモンスターズ、その歴史ははるか五千年前まで遡ると言われている。エジプト発祥のそれは、術者の運命を決める魔術的な儀式であった――らしい。

専門家でない彼に細かい事はわからないが、ひとつ分かるのはそれが世界的に有名な競技であるということ。

そしてたまたま先日見たネット放送されていた１つのデュエル。

その圧倒的な映像、目まぐるしい速度の攻防。そして何より、王者が呼び出した五つ首の龍。

それを見てしまっては多感で格好良さに憧れる、未だ少年の抜けない青年としてはある種仕方の無い事だったのかもしれない。

――ともかく、素人なりに最寄りのカードショップに寄り、一束いくらのカードにより構成された５００枚入ほどの塊を購入した彼は、徹夜でそのデッキを組んだのである。

まあ、その結果が寝坊による学校への遅刻なのだが。

「あと１０分…！全力ならギリギリ！」

一目散に未だ慣れない学校への道を爆走する京太郎。

だからだろうか、曲がり角を曲がろうとしてその先にいる人影に気付くのが遅れてしまった。
「え?うわっ!」
「あっ!?」
どん、と重いもの同士がぶつかり合う音が響く。
思わず尻もちをつく京太郎と相手。衝撃でぱらぱらとケース内のカードが宙を舞う。
「いてて…」
「いってぇ…、あっすみません!大丈夫ですか!?」
臀をさすりながら立ち上がり、ハッとして相手の無事を確認する京太郎。
その先には京太郎より若干背の低い、穏和そうな青年が倒れ込んでいた。だが、どこか年上っぽい包容力のような物を感じさせている。
「うぅーん…あぁ、大丈夫、大丈夫。ちょっと衝撃が来たど、このくらいは慣れてるから」
「そうですか…すいません、前を見てなくて!」
「それは俺も同じだから気にしないで」
同じように腕をさすりながら立ち上がり、青年は京太郎へ顔を向ける。
すると京太郎の服装を見て、学生だと思い至ったのか。苦笑いを見せながら喋りかけた。

「もしかして、学生？それにその服の新しさ…新入生かな」
「あ、はい！遅刻しそうになって急いでて…」
「そっか、俺もこっちに戻ってくるのは久しぶりでさ。懐かしいなーなんて見回しながら歩いてたんだ。お互い様だね」
「そ、そうですね…？」
　ははは、なんて呑気そうな笑いを見せる青年に、若干の困惑を見せる京太郎。どちらかと言えば走っていたこちらの過失が大きそうだが…。
　本人は特に気にした様子もなく、やがて散らばってしまったそれに目を向けた。
「これは…デュエルモンスターズ？君もやるのかい？」
「は、はい。と言ってもまだ始めようと思ったばっかりで、ルールもろくに把握してないんですけど…」
　そこまで言ったところで、京太郎はふと気付く。
「えと、君もって事は貴方も？」
「うん、こう見えてなかなかに強いんだよ？俺のいた所じゃ１番って言われてたりもするんだ」
「そ、そんなに……！」
　思わぬ先達との遭遇に、若干の緊張を見せる京太郎。

体育会系に育ち、過去バレーボールにおいても先輩達から多大な世話になった京太郎としては、先達というだけでイマイチ頭の上がらない存在なのである。

と、青年がかがみ込んで散らばったカードを拾い始める。それを見た京太郎も、自分のばらまいたカードを先輩に拾い集めさせるのは申し訳が立たない、と慌てて拾い始めた。

一通り拾い集めただろうか。ふと拾ったカードを見つめる青年。

「…ふぅん、初めてにしては中々よく組めてるじゃないか。細かいところを見れば色々あるけど、経験もなしに1人でこれを組んだなら上出来だと思うよ」

「あ、ありがとうございます！」

スっと差し出されたデッキの片割れを受け取り、望外の賛辞に思わず礼を返す京太郎。

デッキの半分超くらいしか見ていない筈だが…やはり経験者からすると分かるものなのだろう。もはや京太郎の気分は有頂天である。

「…そうだね、これも何かの縁だ。これを君にあげるよ」

「え…？」

彼が懐から取り出した2枚のカード。それは紛れもなくデュエルモンスターズ。

しかも、そこに描かれているのは京太郎のデッキの不在の穴を埋めるようなエースモ

ンスターの姿。
　呆然と見ていた京太郎だが、我に返り慌てて拒否する。
「そ、そんな！いただけませんよ！ご迷惑をかけたのにこんな…」
「お互い様って言ったでしょ？それに、このカードも俺よりは君に使われた方が嬉しいだろうし…。そうだね、強いて言うなら…」
　なにか悪戯を思いついたかのようなニヤリとした笑顔。
「ラッキーカードだ。こいつらが君のところへ行きたがっている」
「は、はぁ…」
　なんてね、と半ば押し付けられたかのように手渡されたカードを前に、困惑の色を隠せない京太郎。
　受け取ったそれを見つめる京太郎を満足気に眺めながら、上機嫌に手を振って歩き出す青年。
「じゃあね、機会があったらまた会おう」
「え、あっはい！」
　鼻歌を歌いながら道を歩いてどこへともなく消えていく青年。
　京太郎はそれを見送り――自分が遅刻の縁にあったことを思い出した。
「ってやっば！もうＨＲ始まってる！完全に遅刻だーっ！」

「…それで遅刻しちゃったんだ」
「ああ…」
一緒に食堂にて昼食を食べていた少女――宮永咲に大まかな事情を説明し終え、項垂れる。
結局、あの後ＨＲ中に教室に到着し、先生にこってり絞られる羽目になってしまった。
が、宮永咲の関心はそこにはない。
「ふぅーん、でも京ちゃんがデュエリストかぁ…」
「…なんだよ」
「うぅん、なんでも。でも大丈夫?デュエルモンスターズって構築はもちろんだけどプレイングからタクティクスなんかの頭脳面から、場合によってはスタミナまで要求されるそこそこ大変な競技だけど」
「その辺は大丈夫だって!俺は自分で言うのもなんだがそこまで地頭は悪くはないし、スタミナは言わずもがなだ。バレーボールやってたしな」
「それは知ってるけど…」

咲はなにやらモヤモヤしたものがある様で、なかなか煮え切らない様子だ。
と、京太郎が何やら気づいたかのように話を切り出す。
「そういや咲。お前けっこうデュエルに詳しそうだな」
「え？な、なんで？」
「いや、ほら。プレイングがどーだのスタミナだの言ってたじゃねぇか。それって経験者だから言えることだろ」
「あっ…」
しまった、という態度を隠しきれない咲。
それで確信した京太郎は、良いことを思いついたとでも言うように嬉々として提案をする。
「よし！咲、ちょっと放課後付き合え！」
「えっ!?」
「デュエル部だよデュエル部！一緒に入ろうぜ！デュエル部にさ！」
え、と固まって思考も止まった咲。
何を隠そう、彼女はかなりの引っ込み思案である。こうして京太郎と話せているのは京太郎自身が咲へと歩み寄った結果であり、咲自身が積極的に何かに関わるというのはいままでほとんど無かった。

いわば究極の事なかれ主義である。加えて最近にデュエルにおいて身内感でちょっとした問題があった事もあり、その提案に乗るには少し抵抗を感じずにはいられない。
「そ、それはちょっと…」
「ちぇー、いい考えだと思ったんだけどなぁ」
不満げな顔を見せる京太郎。それを見て少しうっ、と思ってしまう咲。
思えば、京太郎も別に悪意があって言った訳ではなく、善意からの発言だろう。
こうして一方的にたたっ斬ってしまうというのは、少しばかり礼儀に欠けるのでは？
別にそんなことは無いし、嫌なら嫌と言えば良いのだが、気が弱く心底に優しさを持った咲からすると、そのように思い込んでしまう事情となった。
「…デュエル」
「ん？」
「なら、デュエルで決めない？京ちゃんが勝ったらデュエル部に入る。私が勝ったらデュエル部に入らない。」
いや、その理屈はおかしい。と一瞬思う京太郎であったが、口に出さずしまい込む。
デュエルで決着、というのであればわかりやすいし可能性があるだけでも好都合である。
デュエルは互いのドロー運やら戦術やら多くの要素が絡んだゲームだ。

となれば、経験者相手だとしても勝つ可能性は十分にある…と、京太郎は考えた。
「よし！約束だぜ！俺が勝ったらデュエル部だ！」
「…うん！」

「「デュエル！」」
須賀京太郎　ＬＰ４０００
　　ＶＳ
宮永咲　　ＬＰ４０００

「先行は貰うぜ！俺のターン！」
先行を手に入れ、自身の手札を確認する京太郎。
対する咲も、自らの手札を確認し、とるべき戦術を練る。
「(…うーん、この手札なら)」
「いくぜ！俺は手札からフィールド魔法、『召魔装着』を発動！」
テーブルの上のフィールド魔法ゾーンに魔法カードが置かれ、その効果が適用され

る。

「このカードがある限り、俺のフィールドの魔法使い族・戦士族・ドラゴン族の攻撃力と守備力は３００ポイントアップするぜ！」

「さらに俺は『召魔装着』の効果を発動する！手札を１枚捨て、デッキから『魔装戦士』を１体、特殊召喚できる！俺は『魔装戦士アルニス』を攻撃表示で特殊召喚！」

手札から『ボルト・ヘッジホッグ』が捨てられ、デッキから魔装戦士アルニスが呼び出された。

そのイラストには、赤い鎧と黄金の左腕を持った女戦士の姿。

「さらにフィールド魔法、『召魔装着』の効果により、アルニスの攻撃力と守備力は３００アップする！」

１７００↓２０００

「攻撃力２０００…」

「おう！これで下級モンスター程度じゃ倒されないぜ！」

得意気にする京太郎に、咲は思わず微笑ましくなる。

確かに、攻撃力２０００もあれば、極一部の下級以外では妥当は容易ではない。

が、数多のカードが存在する今となっては、頼りないと言わざるをえない数値。

咲としては、せっかく本人がデュエルに興味を持ったのなら、圧倒しすぎてトラウマ

にならない様に倒した方がいいかなという思うところではある。
まあ、デュエリストとして手は抜かないのだが。
「さらに俺は永続魔法、『補給部隊』を発動！このカードがある限り、１ターンに１度だけモンスターが戦闘か効果で破壊された場合に１枚ドローできる！カードを２枚伏せて、ターンエンド！」
咲の目がフィールドを確認する。相手のフィールドには２０００になったアルニスが１体、補給部隊と伏せカード。フィールド魔法が１枚。手札は０。
「（伏せカード次第だけど…まあ、倒せるよね）」
「私のターン、ドロー！」
カードを１枚ドローして、どうするかを考え…決めた。
咲は手札のフィールド魔法をフィールド魔法に発動する。
「私は手札から、『白薔薇の回廊（ホワイト・ローズ・クロイスター）』を発動！」
「このカードが存在し、自分フィールドにモンスターが存在しない時、手札から『ローズ・ドラゴン』モンスターか植物族モンスターを特殊召喚できる！」
「植物族デッキか…！」
「ふふ、私はこの効果で手札から『光の王（ジェネレイド）　マルデル』を特殊召喚！」
手札からフィールドにモンスターを置き、そのままデッキへと手をスライドさせる。

その動きは非常に滑らかで、少なくともスポーツマンの端くれだった京太郎からすると、熟練者のものに見える。

「って！いきなり攻撃力２４００だと!?」

「さらにマルデルの効果発動、デッキから植物族モンスターを手札に加えるよ。私は『魔天使ローズ・ソーサラー』を手札に！」

咲はローズ・ソーサラーを手札に加えて、それとは別のモンスターへと手を伸ばす。

「さらに私は手札から、『ローンファイア・ブロッサム』を召喚！そのまま効果発動！自身をリリースして、デッキから植物族モンスターを特殊召喚する！『桜姫タレイア』を特殊召喚！」

呼び出されたのは、先程のマルデルと同じく麗しい姿をした女性のイラストが描かれたカード。その攻撃力は２８００。

「今度は２８００かよ…！」

「それだけじゃないよ、タレイアは自分フィールドの植物族モンスター一体につき攻撃力を１００アップする。この効果により、タレイア自身とマルデルの２体分。つまり攻撃力２００アップ！」

２８００→３０００

「さんぜん…！」

「そして、タレイアがいる限りフィールドの植物族モンスターは効果では破壊されない！…その伏せカードがミラーフォースとかだと、ちょっと怖いからね」
　咲は京太郎の場に伏せられたカードをチラリと見て、自分の手札に視線を戻す。
「(…どうしようかな、多分大丈夫だとは思うけれど念の為、次のターンのことも考えとこうかな)」
「私は手札の『魔天使ローズ・ソーサラー』の効果を発動！フィールドの植物族モンスター、『光の王　マルデル』を手札に戻し、このカードを特殊召喚！ただしこの効果で特殊召喚されたモンスターはフィールドから離れた場合除外される」
　マルデルが手札に戻され、ローズ・ソーサラーが特殊召喚される。
　それが意味するのはつまり…。
「またマルデルの効果が使えるってことか…！」
「うん、そしてローズソーサラーの攻撃力は同じ２４００だから攻撃力の増減は無し」
「なるほど、これがプレイング、タクティクスってやつか…」
「これはまだシンプルな方だけど…」
　ふーむ、と顎に手を当てて真剣にフィールドを観察する京太郎に、どこか気恥ずかしくなる咲。咲にとっては初心者の誰かと戦ったことは無いから初めての経験である。
「続けるよ！これで最後！私は手札から『デーモンの斧』をタレイアに装備！これで攻撃

力は１０００アップする！」
３０００→４０００
「攻撃力４０００!?」
「そ、これで戦闘で突破するのはまず不可能だよ！ローズ・ソーサラーでアルニスに攻撃！」
「くっ！」
須賀京太郎　ＬＰ４０００→３６００
「だが補給部隊とアルニスの効果を発動！ええと…」
「チェーンは逆から処理、だよ」
「よし、じゃあまずはアルニスの効果だ！このカードが相手モンスターの攻撃で破壊された時、デッキから攻撃力１５００以下の魔法使い族モンスターを攻撃表示で特殊召喚する！『アーケイン・ファイロ』を特殊召喚！アーケイン・ファイロは『召魔装着』の効果で攻撃力１３００になる！」
京太郎はアルニスを墓地に送り、デッキからアーケイン・ファイロを場に置く。
「そしてアルニスが破壊されたことにより、補給部隊の効果でデッキから1枚ドロー！」
これで京太郎の手札は2枚。が、咲の猛攻は止まる気配を見せない。
「まだまだ！攻撃力４０００のタレイアでアーケイン・ファイロに攻撃！」

「罠カード発動！『ガード・ブロック』！戦闘ダメージを０にして、デッキから１枚ドロー！」
「えっ!?…だけど、アーケイン・ファイロは破壊されるよ！」
　アーケイン・ファイロが破壊され、京太郎がデッキからカードをドローする。
「…あの伏せカード、ガードブロックだったんだ。確かに安価で手に入るカードだけど、優秀だもんね」
「まあな、このデッキはとにかく消費が激しいから少しでも手札を増やしたいんだ」
　咲は少し驚いた。京太郎はアドの概念を自身で意識している。
　カードは使えば減る、それは間違い無い。問題はその後だ。デュエリストには、大型モンスターを出して終わり、というデュエリストが意外と多い。
　強力な効果を持つモンスターを出すところまでは考えても、その後のことまでは考えが及ばないのだ。
　京太郎はそれをぼんやりとであるが、理解している。
「…意外と京ちゃんはデュエリストに向いてるのかもね」
「ん？」
「何でもないよ、私は１枚伏せて、ターンエンド！」
　咲の場に伏せカードが１枚置かれ、ターンを終了される。

この場は凌いだといえ、咲の場には効果破壊されない大型モンスターが２体。しかも一体は攻撃力４０００にもなる特大のモンスターだ。

しかも、それらを打ち破ってもライフを削りきらなければ相手には白薔薇の回廊とマルデルのコンボがある。

生半可な手段では、突破は不可能。少なくとも、今の京太郎にはその手段は思い浮かばなかった。

…まあ。

「引いてから考えるか…」

そう呟いてデッキトップに手を置く。

「俺のターン、ドロー！」

カードをドローし、手札は3枚。ライフは３６００。墓地には下級が三体。場には伏せが1枚。

対して相手の場には伏せカードが1枚、大型モンスターが2体。加えてそのモンスターの効果により効果では破壊されず、装備魔法の効果で攻撃力が１０００アップして…。

そこまで思考して、京太郎の思考がピンと張り詰める。

「（そういえば攻撃力を１０００ＵＰさせるカード、俺もあるな。それを使えば勝てるか

も…。まあそれでもあの伏せカードがあるんだが…）」

京太郎の脳内であらゆるルートが構築されては消えていく。

「この状況で、あのカードを最も掻い潜れる可能性のある戦術は…あのカードの…」

やがて、全てのルートは繋がった。

「これだ！俺は手札の『ミニマム・ガッツ』を墓地に送り、『召魔装着』の効果でデッキから『魔装戦士　ヴァンドラ』を特殊召喚！」

「ヴァンドラ…ダイレクトアタッカー？」

「いいや、違う！俺はさらに、手札から魔法カード『調律』を発動！このカードは、デッキから『シンクロン』チューナーを手札に加え、デッキをシャッフルしてからデッキの１番上のカードを墓地に送る！」

「この効果により、『ジャンク・シンクロン』を手札に加え、シャッフルしてからデッキの１番上を墓地へ！」

落ちたのはモンスターカード『サイバー・ドラゴン』。しかし今の京太郎にはそれは関係なかった。

「手札から、チューナーモンスター『ジャンク・シンクロン』を召喚！このカードが召喚に成功した時、墓地からレベル２以下のモンスターを効果を無効にして特殊召喚できる！俺はチューナーモンスター『アーケイン・ファイロ』を特殊召喚！」

「チューナー…5と3と2…ちがう、今京ちゃんの墓地には！」
「自分のフィールドにチューナーがいる時、墓地の『ボルト・ヘッジホッグ』は特殊召喚できる！」
　墓地から蘇生されるボルト・ヘッジホッグ。そのレベルは2。
「よし、俺はレベル3のチューナーモンスター『ジャンク・シンクロン』とレベル5のヴァンドラでシンクロ！」
　呼び出されるのは、今朝あの青年から貰った1枚。
「シンクロ召喚、レベル8、『ギガンテック・ファイター』！」
　レベル8、攻撃力2800、自己強化持ちの大型シンクロモンスター。
　その性能は、ハマれば十分に強力である。
「そして、レベル2チューナー『アーケイン・ファイロ　』とレベル2『ボルト・ヘッジホッグ』でシンクロ！レベル4、『アームズ・エイド』！」
　テーブルの上に置かれたのは巨大な爪のような見た目のシンクロモンスター。モンスターに装備され、その攻撃力を大きく引き上げることができるモンスターの一体である。
「…なるほど、墓地に戦士族はジャンク・シンクロン、アルニス、ヴァンドラの3体だから攻撃力300アップ。そしてフィールド魔法の効果でさらに攻撃力は300アップ、

アームズエイドを装備すればさらに１０００アップで最終的に４４００。」
「それでローズ・ソーサラーを倒して、バーン込みで４４００のダメージを与えてワンショットキルってこと？」
咲が真剣な顔で京太郎を見つめる。それは当初のような初心者に対するそれではなく、紛れもなく一介のデュエリストに対する目。
初めてその目を見た京太郎は一瞬怯むが、直ぐに不敵な笑みを浮かべた。
「――それはどうかな！」
「!?」
「俺は、アームズ・エイドをタレイアに装備！」
「何を…、…!?」
咲は京太郎の狙いに気づいた。しかし、これは止められない。
咲の場に伏せられているのは『プライドの咆哮』。その効果は『攻撃対象になった自分モンスターの攻撃力が相手モンスターより低い場合に、その攻撃力の差の分ライフを払って相手の攻撃力を３００上回る』というもの。
自分のモンスターのほうが攻撃力が上ならば、使うことはできない。
４０００→５０００
「行くぜ咲！俺は攻撃力３４００のギガンテック・ファイターで、桜姫タレイアに攻撃

！」

須賀京太郎　ＬＰ３６００→２０００

「そして、ギガンテック・ファイターが破壊された時、アームズ・エイドの効果を発動する。」

この戦法は、必ずしも相手のモンスターに勝つことを必要としない。

それは、条件さえ揃えば一気にゲームエンドまで持っていく火力がある！

「アームズ・エイドの効果！装備モンスターがモンスターを戦闘破壊した時、その元々の攻撃力分のダメージを相手に与える！装備されてるのはタレイアだが、アームズ・エイドのコントローラーは俺だ！よって咲に２８００のダメージ！」

「な…！」

宮永咲　ＬＰ４０００→１２００

唖然とする咲、まさかこんな戦法で――。

「そして、罠カード発動！『奇跡の残照』！このターン戦闘によって破壊されたモンスター一体を、特殊召喚できる！俺はこの効果でギガンテック・ファイターを特殊召喚！」

そして、再度特殊召喚されたということは。

「続けてバトルだ！俺は復活した『ギガンテック・ファイター』で、タレイアに再び攻撃！」

須賀京太郎　ＬＰ２０００→４００
「そしてタレイアに装備されたアームズ・エイドの効果を再び発動！戦闘で破壊したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを与える！」
宮永咲　ＬＰ１２００→０
「…負け、た」
初心者を相手だからと言って油断したつもりは無かった。少なくともあの手札では最善であったし、普通の相手であればもちろん負けるはずはなかっただろう。
「（…でも、負けたんだよね）」
ならば、デュエリストとしてはそれを受け入れるしかない。鈍っていたデュエリストとしての感覚が研ぎ澄まされていくのを感じる。
「（京ちゃん、面白いなぁ）」
初めて１週間と経っていないと言っていたのを咲は思い出した。それでこれほどならば、育てばどれほどのデュエリストになるのだろう。
「（うん、やっぱり、デュエルって楽しいなぁ）」

そして、咲はデュエルを楽しむことを思い出した。

「あらいらっしゃい、待ってたわよ」
　デュエル部の部室、赤毛の髪を肩にかかるまでのばした女性――デュエル部部長らしい――がやってきた咲と京太郎を出迎えた。
「えと、待ってたってどういう？」
「あら、見てたわよー昼休みのデュエル。強力な植物族モンスター達を操る『花咲き』の宮永さんに、巧みな戦術で不死身の戦士達を操る『不屈』の須賀くん？」
「なんですか!?その恥ずかしいの！」
　思わず大声で問いただす咲に、えーという表情の京太郎。
「何って、掲示板よ掲示板。学校の生徒だけが使える専用の掲示板があるの。ほら」

２５：清澄の名無しさん　２０ＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　１６：１７：００　ＩＤ：５Ｐ９Ｚ６１９ＬＸ
　おい、あの昼休みのデュエル見たかよ

２８：清澄の名無しさん　２０ＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　１６：１８：３９　ＩＤ：＋５ｈＦＶＷｈＡＫ
　＞＞２５　見た見た、すっげえレベル高かったよな

３０：清澄の名無しさん　２０ＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　１６：２０：３９　ＩＤ：ｙＮＫ／９ｅｐＭＨ
　あれってデュエル部の人？

３５：清澄の名無しさん　２０ＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　１６：２２：２４　ＩＤ：Ｚｃｌｓ９ｅＷＰＦ
　いや、新入生っぽい。デュエル部も心強い新入部員ができて安泰だな

３７：清澄の名無しさん　２０ＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　１６：２３：５４　ＩＤ：Ｅｎｗ５ｌＨ／Ｉｏ
　腕は確かなのに人数足りなくて大会行けなかったもんなぁ

４１：清澄の名無しさん　２０ＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　１６：２５：２５　ＩＤ：ＹＸｎｗ

ｅｐＡｑ＋
ところで２つ名どうするよ、俺は使ってるデッキに因んで女の子の方には『花咲き』でいいと思うんだが

４３：清澄の名無しさん　２０ＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　１６：２７：１１　ＩＤ：１ＡＸＧＦＭ／Ｌｂ
＞＞４１　草
じゃあ男の方はあの戦法からとって『不屈』だな

「なぁにこれぇ」
「…」
京太郎はその光景に唖然とし、咲は羞恥のあまり顔真っ赤にしてプルプル震えだす。
部長――竹井久は笑って２人に歓迎の言葉を投げかける。
「ようこそ、清澄高校デュエル部へ。期待のニューホープさん？」

第２話／燃え上がる覇者

「――私は『炎斬機（えんざんき）マグマ』でダイレクトアタック！」

白銀と赤熱の鎧を身に纏った騎士が、その豪炎の剣を振り下ろす。

「この瞬間！俺は墓地の『クリボーン』の効果を発動！このカードを除外し、墓地の『クリボー』モンスターを任意の数だけ特殊召喚できる！」

男――遊陣というデュエリストがそう叫んだ瞬間、剣を振り下ろさんとしていたマグマの前に青いシスター帽のようなものを被った白い球体…クリボーンが現れた。

突然の出現に不意を突かれたか、シグマの動きが一瞬止まる。その一瞬の猶予の間にクリボーンから眩い閃光が放たれ、分裂した。

「この効果により、墓地から『クリボー』『ハネクリボー』『アンクリボー』『クリボール』を守備表示で特殊召喚する！」

気づけば、そこにはこのデュエルにおいて様々な要因で墓地へと送られたクリボー達。

「くっ…しかし無駄です！どれだけモンスターを並べようとも、私のマグマには及びません！私は巻き戻しの発生でクリボールを攻撃対象にします！」

「クリボールを対象に速攻魔法『ドロー・マッスル』を発動！このカードは、守備力１００以下の表側守備表示モンスターに戦闘破壊耐性を付与し、さらにデッキから1枚ドローできる！」

発動された速攻魔法から光が放たれ、クリボールに集まる。次の瞬間、クリボールの手足のような部分が筋骨隆々に膨れ上がり、マグマの一撃を正面から受け止めた。

「っ！けれど『斬機ナブラ』の効果でこのターンマグマは2回攻撃できます！私はクリボーに攻撃！」

マグマの一撃目をどうにか避けたクリボーは、いつの間にか増えていた剣の存在に気付かず返す手で一刀両断され…ない。

「俺は罠カード『和睦の使者』を発動していた！これでお前の攻撃は終わりだ！」

「…私はこれでターンエンドです」

「そして、エンドフェイズにマグマに適用されていたナブラとマルチプライヤーの効果は終了し、２回攻撃は失われ攻撃力は２５００に戻る」

体から豪炎を放ち、二刀の剣を携えていたマグマの体から吹き出る炎がその勢いを減らし、剣は幻だったかのように掻き消え、クリボールは普段通りの姿に戻った。

炎斬機マグマ　ＡＴＫ５０００→２５００

「俺のターン！ドロー！」
　カードを引いた遊陣は、相手の墓地を見詰め、ドローカードを叩きつける。
「俺は手札から、『死者蘇生』を発動！このカードは、自分か相手の墓地に眠るモンスター一体をできる！俺が選択するのは、お前の墓地の『斬機シグマ』！」
「えっ!?」
　驚く対戦相手をよそに、紅白の騎士のようなモンスター、シグマが遊陣の場に蘇った。
「使わせてもらうぞ、お前のカードを！俺はレベル１のクリボー、クリボール、ハネクリボー、アンクリボーの４体に、レベル４の斬機シグマをチューニング！」
　シグマの体が４つのリングに分裂し、４体のモンスター達を取り囲む。やがて全てが収束したそこには――。
「現れろ――――」

「――夢ですか…」
　そう呟いて少女――原村和は体を起こす。
　前を見れば、寝落ちしてしまったようで同じ動画がリピート再生されているらしいパ

ソコン。

再生されている動画は、『決闘王　坂巻遊陣デュエル集（最新版）』。

いつか雪辱を果たすため、遊陣のデュエルを分析していたのだが…。

「…ダメですね。Ｌ・Ｇ・Ｄ（リンク・ゴッド・ドラゴン）を手に入れて、それを主軸にしたデッキに調整されてからというもの、全く付け入る隙が見えなくなりました。」

過去の坂巻遊陣の戦い方は、容易に蘇生できてサポートも豊富なクリボーたちを使って展開し、様々なカードを使って相手を突破。あるいは相手のカードさえ利用して使いこなす、一種のメタコントロールデッキだった。

であれば対処の仕方もあるというものだが、Ｌ・Ｇ・Ｄを使い始めてからは話は別だ。効果で破壊されないモンスターを出しても、大抵パワーで及ばない。攻撃力で勝ろうとも、大抵の場合はあの全体破壊で殲滅されるだけ。

そうでなくても、あのキングのＥＸデッキは厄介極まりないカードで埋め尽くされているのだ。Ｌ・Ｇ・Ｄの召喚を阻止したとして、他のカードで倒されて終わり。

結論、手詰まりである。

「…はぁ、ダメですね。何一つ進展しません。やはりあの方法しか…」

額を抑えて背もたれによりかかり、ジッと天井を見つめる。

机で寝落ちしたせいで疲れが取れきっていないのか、若干体が重いようだ。
その姿勢のままパソコンに目を戻し――
「…とりあえず、学校、行きましょうか」
その右下に映されている時計はいつもの登校時間より少し遅い時刻を示していた。

「おー待たせたな、のどちゃん！」
「あ、優希」
授業が終わり、放課後のデュエル部室。和より少し遅れて入って来た少女――片岡優希に目をやって、手元にあった資料を見せる。
「見てください、どうやら私たち以外にも２人の新入部員が来るそうですよ。男子女子が１人ずつです」
「マジか!?ってことはこれで大会の団体戦に出られるじぇ！」
「ええ、そうなりますね」

これで当面の懸念事項は解消され、デュエルに集中できるわけである。

「ふーん…【植物族】に【魔装戦士】かー。悪くないテーマだじぇ」
「魔装戦士の方の男子…須賀京太郎くんはまだ初めて間もないみたいですね。けど書いてある情報を見る限りなかなかなかなデュエリストの素質を持っている様です」
「おー、そいつは楽しみだな！先達として色々教えてやるじぇ」
「そして植物族の方の…宮永咲さんですね。そちらは経験者だそうで、テクニカルなタイプのデュエリストだとか」
「テクニカルってことはのどちゃんとは正反対か」
「え？」
「なんでもないじぇ」
　ピュ～と口笛を吹く優希を不思議そうに眺めた和は、書類を置いて席を立つ。
「さて、そうとわかれば歓迎の準備だじぇ！」
「そうですね」

「ええと、なんでこんなことになってるんです？」
　左腕にデッキがセットされた旧型のデュエルディスクを嵌め、原村和と相対する京太郎。

場所は旧校舎の外、少し開けた場所である。ギャラリーには麻雀部員と、どこから聞き付けたのかパシャパシャと写真を撮りまくる新聞部らしい女子生徒数人の姿。

入部後の初活動という事で、部員みんなで自己紹介をして友好を深めた――と思ったら突然外に連れ出されてあれやこれやの果てに現在である。

正直京太郎当人からするとわけが分からない部分が大きい。なぜ部内のルールだのの説明も無くいきなりデュエルに至っているのか。

「デュエル部の歓迎と言ったらやっぱこれだじぇ」

「まあデュエルを通じて相手を理解できることもあるじゃろうし」

「部長としては新入部員達の正確なデュエルの腕も知っておきたい所はあるわね」

「京ちゃんがんばれ――！」

どうやら京太郎に味方はいないらしい。これは男女だから――というより、デュエリストであるかどうかであるが肝心の京太郎はデュエルに関してあまり詳しくないため男女感覚の差か何かだと考えていた。

「さて、それでは始めましょうか須賀くん」

「ああ…」

京太郎は目の前でデュエルディスクを構える少女に対して思考する。第一印象は胸部が人並外れてデカい美少女、できればお近づきになりたいだのと密かに思っていた相

手である。

が、それが中学のデュエルでインターミドル優勝者であるなどということを知り、こうしてデュエルするはめになったとなると、すっかりそんな感想は頭の中から消えていた。

単純に怖い。初心者である自分がインターミドル優勝者であるらしい相手に勝ちは愚か善戦すらできるとは到底思えないのである。

必死に頭を回して、常に最良の手札を引き当てないとまともに太刀打ちすらできない相手。それが京太郎の想像上の原村和という少女だった。

さらに、今回は京太郎にとって初めてである『デュエルディスク』と『ソリッドビジョン』を用いたデュアルである。噂では多少なりとも衝撃とかあるらしい。

加えて今回のデュエルでは、あのカードの人から貰ったエースモンスター用に開封済み寄せ集めパックから入れ替えて微調整した新デッキであった。その性能は自身でも未知数である。

何もかも未知、未知。となれば多少なりとも気が引けた。

しかし、部員の様子や相手を見るに逃げ場はなさそうである。やるしかない。

「よし…！」

半ばヤケクソでデュエルディスクを構える京太郎。その姿を見た和はほう、と言葉を

漏らす。
「（初心者ということでしたが…デュエルディスクを構える姿は案外様になりますね。いい気迫です）」
　密かに和の中で京太郎の評価が上がる。
　それだけ、と思うかもしれないが、『デュエルディスクが似合うのは優れた決闘者の証』という共通認識がこの世界にはある。それは例えデジタル派決闘者の和であっても例外ではない。
「（なるほど、素養があると言うだけのことはありそうです）」
「では始めましょうか」
「おう！」
「「デュエル!!」」

須賀京太郎　ＬＰ４０００
原村和　　ＬＰ４０００

「先行は私がいただきます」
　先行を取ったのは和、５枚の手札を確認し、一瞬で戦術を構築する。

「私は手札からチューナーモンスター『斬機(ざんき)シグマ』を特殊召喚します！」
　場に光とともに現れたのは、紅白の鎧と1本の剣で構成された体を持つレベル４モンスター。その身長からすると大剣とも思える剣を京太郎へ向けて構えている。
「このカードは、ＥＸモンスターゾーンに自分モンスターが存在しない場合に手札か墓地から特殊召喚できます。ただしこのカードはフィールドから離れた場合に除外され、このターン私はＥＸデッキからサイバース族しか特殊召喚できません。」
「すげぇ…これがソリッドビジョンか……！」
　まるで現実にモンスターが現れたかのようなその光景に、画面越しでは得られない実感を得た京太郎は感動を覚える。
「(なるほど、これはみんなが熱狂的するわけだ)」
「サイバースか…展開力に優れた種族だね。リンクモンスターを扱うことが多い種族だよ」
「それは普通のやつに限って、だじぇ。のどちゃんの場合は少し違うな」
　咲の言葉に、訂正とばかりに返す優希。やはり親友なだけあるのか、和のデッキは知り尽くしている様子である。
「(のどちゃん、あまりやりすぎないと良いけど…)」
「さらに私は、手札から『斬機(ざんき)サブトラ』の効果を発動します！このカードはフィールド

の表側表示モンスターを対象に取り、特殊召喚できます！」
　現れたのはマントのようなものを着けた紅白の剣士。その剣を侍のように腰に構えている。
「そして、対象にとったモンスターの攻撃力をターン終了時まで１０００ポイントダウン。そしてこの効果で特殊召喚したこのカードはこのターン攻撃できません」
　斬機シグマ　ＡＴＫ１０００→０
　その構えた剣を地面に刺し、戦闘態勢を解いたシグマ。その攻撃力は０になってしまう。
「フィールドのモンスターの攻撃力を１０００下げて自身の攻撃を放棄する代わりに特殊召喚可能なモンスターか…なかなか優秀なカードだね」
「…そうだったら良かったんだけどなぁ」
「？」
　どこか遠い目をしてデュエルを見つめる久に、怪訝な表情を浮かべる咲。
　隣では優希が苦笑いを見せる。
「私は、レベル４の斬機シグマと同じくレベル４の斬機サブトラの２体で、オーバーレイ！」
「!?」

突如としてフィールドに巨大な黒い渦が現れ、そこへ黄と赤の光へ変化したシグマとサブトラが吸い込まれていく。

その光景を初めて見た京太郎は何事かと戸惑うも、構わずに和はデュエルを続ける。

「2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！エクシーズ召喚！」

黒い渦が収束していき、消えると思いきや突然爆発するように広がる。

気がつくとそこには、黄と黒の装甲を持ち黄色の稲妻を纏った騎士が立っていた。その周囲には2つの球体が円を描くように漂っている。

「ランク4！『塊斬機（かいざんき）ダランベルシアン』！」

「エクシーズ…！」

「このカードは、X（エクシーズ）召喚に成功した時、使用するオーバーレイユニットの数によってその効果を変化させるモンスターです」

「2つ使用した時の効果は、『デッキから『斬機』カードを手札に加える』。3つ使用した時の効果は、『デッキからレベル4モンスター1体を手札に加える』。4つの効果は、『デッキから魔法・罠カードを1枚を手札に加える』」

「ええと、エクシーズ召喚に使用されたモンスターはそのモンスターエクシーズのオーバーレイユニットになるんだよな。ってことは…」

「私はオーバーレイユニットを２つ使い、効果を発動！デッキから『斬機』カードである罠カード『斬機超階乗』を手札に加えます！」

デッキから自動的に抜き出された『斬機超階乗』を京太郎に見せ、手札に加える和。

「好きなカードをサーチできるのか…！」

「それだけではありません！私はダランベルシアンの更なる効果を発動！自分フィールドのモンスター１体をリリースし、手札か墓地からレベル４の『斬機』モンスターを特殊召喚できます！私はダランベルシアン自身をリリース！」

「せっかく出したモンスターエクシーズを!?」

ダランベルシアンの体が０と１で構成されたデータに分解され、再構成される。そこにはエクシーズ召喚の素材となったはずの斬機シグマの姿があった。

「そうか…エクシーズ召喚の素材になったモンスターはそのモンスターのオーバーレイユニットになる。でもそれはフィールドから離れた扱いじゃないから…」

咲の呟きを聞いて、京太郎はそんなのアリかよと思った。

「ふふ、私は『斬機シグマ』を特殊召喚！更に手札の『斬機ディヴィジョン』を通常召喚！」

今度は先程のダランベルシアンと同様黄と黒の鎧を持ったモンスターが現れる。

「更にシグマを対象に手札の『斬機アディオン』の効果発動！このカードを特殊召喚し、

シグマの攻撃力を１０００アップする！」
「今度は強化か!?」
　弱体化だけではなく強化まであるのか、と京太郎は戦慄する。
「私はレベル４のシグマとディヴィジョン、アディオンでオーバーレイ！」
「またかよ!?」
「３体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！エクシーズ召喚！」
　再びエクシーズ召喚のエフェクトと共にモンスターが現れる。
「ランク４！『塊斬機（かいざんき）ラプラシアン』！」
　現れたのは先程とはまた別の黄と黒の装甲のモンスター。
「そして、このカードがＸ召喚に成功した時にオーバーレイユニットを３つまで使用して、次の効果から取り除いた数まで選択して効果を発動できます！」
「１つは『相手の手札をランダムに墓地に送る』効果！２つ目は『相手のフィールドのモンスター一体を選んで墓地に送る』効果！最後は『相手の魔法・罠カードを１枚選んで墓地に送る』効果です！」
「でも、俺の場にはまだカードは無いぞ?」
「ええ。ですから私はオーバーレイユニットを１つ取り除き、１つ目の効果を発動します！相手の手札をランダムに１枚捨てる！」

ラプラシアンの体から紫の稲妻が迸り、京太郎の手札の1枚を弾き飛ばした。
「何!?」
墓地に落ちたのは永続魔法『補給部隊』。京太郎のデッキにおいてドローエンジンの役割を持つ重要なカードである。
「ふむ、補給部隊ですか。展開用カードではなかったにせよ、ドローカードを潰せたなら上出来ですね」
「くっそ…!」
「私はカードを1枚伏せ、ターンエンド!」
魔法・罠ゾーンに伏せカードが出現し、ターンが京太郎に回る。
「俺のターン、ドロー!」
「原村さん、結構動いたね」
「でものどちゃんのあれは本来後攻用の動きだじぇ。その証拠にラプラシアンの効果を十全に発揮できてないし、手札は残り1枚になってる」
「和なりの手加減ってことかしら」
「でもああも動かれたら京太郎のプレッシャーはかなりのものだと思うがの」
ドローした京太郎は5枚の手札を見て冷静に戦術を構築する。
「(補給部隊を捨てさせられたのは痛いけど、この手札ならなんとか…)」

「俺は手札からフィールド魔法『召魔装着』を発動！このカードがある限り自分フィールドの戦士族・魔法使い族・ドラゴン族は攻撃力守備力を３００ポイントアップする！」

フィールドの中央に不可思議な光の渦が出現し、そこから光が一帯へ広がる。風景に大きな変化はないが、その効力はしっかり働いているようだ。

「そして俺は召魔装着の効果発動！手札を１枚捨ててデッキから『魔装戦士』を一体特殊召喚できる！手札の『魔装戦士テライガー』を墓地に送り、デッキから『魔装戦士ヴァンドラ』を特殊召喚！」

光の渦から鎧のパーツが放出され、それが京太郎のフィールドで組み立てられるように人型を形成する。やがてそこに青い鎧と金の左腕に片翼で構成されたヴァンドラが出現した。

「さらに俺は手札からチューナーモンスター『ジャンク・シンクロン』を召喚！」

勢い良く手札をディスクに置くと、ジャンク・シンクロンが出現し、その体についたレバーを引きエンジンを吹かすような音が響く。

「俺はレベル５のヴァンドラに、レベル３のジャンク・シンクロンをチューニング！」

ジャンク・シンクロンが３つの光輪に分裂し、ヴァンドラを囲むように配置される。

「シンクロ召喚！レベル８！『ギガンテック・ファイター』！」

遥か上空からギガンテック・ファイターが現れ、地面を盛大に砕きながら着地する。

いわゆるスーパーヒーロー着地と呼ばれるそれから立ち上がり、仁王立ちでラプラシアンに相対した。
「おぉ！かっけぇ！」
「――このカードは」

『現れろ！レベル８！全てを砕く不屈の闘士！『ギガンテック・ファイター』！』

「（あの時、私のマグマを打ち破ったシンクロモンスター……！普通に出回っているカードですけど…）」
「いくぜ！俺はギガンテック・ファイターでラプラシアンに攻撃！ギガンテック・ファイターの攻撃力は墓地にジャンク・シンクロンとヴァンドラ、トライガーがいる事で３００アップ！さらに召魔装着の効果で３００アップし３４００！対するラプラシアンは２０００だ！」
原村和　ＬＰ４０００→２６００

ラプラシアンの剣とギガンテック・ファイターの拳がぶつかり合い――一瞬の拮抗と共に拳が剣ごとラプラシアンを打ち砕いた。
「ラプラシアン撃破！俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド！」
京太郎の手札が1枚になり、ターンが和に返される。
「…なるほど、動きはシンプルながらたしかに使いやすい優秀なデッキです。そしてその使い手であるあなたの判断力も初心者のレベルではない」
「お、おう…そう褒められるとなんかむず痒いな」
「けれど、そのデッキの急所も見えました。魔装戦士の時点で予想はできていましたが」
「何!?」
「私のターン！ドロー！」
和がデッキからカードをドローし、そのカードを確認。手札に加える。これで手札は2枚となった。
「そうですね…すこし仕掛けてみましょうか」
そう呟くと、伏せカードに向けて手を翳す。
「メインフェイズ、私は罠カード『斬機超階乗』を発動！」
反転し、その正体を顕にする伏せカード。それはダランベルシアンの効果により手札に加えられていた『斬機超階乗』のカードだった。

「このカードは墓地の『斬機』モンスターを3体まで対象として発動し、そのモンスターを効果を無効にして特殊召喚できる。そしてそのモンスターのみを素材としてＳ（シンクロ）召喚、またはＸ（エクシーズ）召喚できる！」

「墓地から特殊召喚して、そのままＥＸ召喚!?」

「…ただし、この時特殊召喚する『斬機』モンスターは全て異なるモンスターでなくてはなりません」

フィールドに光り輝く三角形のエフェクトが走り、その頂点の二角に2体の斬機が現れた。

「私は墓地からチューナーモンスターのシグマとディヴィジョンを特殊召喚！そしてこの2体を用いてシンクロ召喚を行います！」

「レベル４『斬機ディヴィジョン』にレベル４の『斬機シグマ』をチューニング！」

シグマの体が４つの輪になり、ディヴィジョンの体を囲む。

突如としてディヴィジョンの体が燃え上がり、その炎がより大きな人型に広がる。

「灼熱の剣携えし斬機士！その炎（ほむら）纏いし剣（つるぎ）で敵を根絶せよ!!シンクロ召喚！」

「レベル８！『炎斬機マグマ』!!」

炎の中から剣が突き出され、振るわれたと同時に纏わりついた炎が一瞬に掻き消える。

そこには焔と純白の鎧を纏った斬機士が佇んでいた。
「レベル８のシンクロモンスター…！けどその攻撃力は２５００！それじゃギガンテック・ファイターは倒せないぜ！」
「まだです！さらに私は、シンクロ素材となって墓地へ送られたディヴィジョンの効果を発動します！」
「このカードが墓地へ送られた場合、フィールドの表側表示モンスター１体を対象として発動できます！私はギガンテック・ファイターを対象に選んで、その攻撃力をターン終了時まで半分に！」
「なんだと!?！」
墓地からホログラムのようなディヴィジョンが出現し、一瞬回路のような線がギガンテック・ファイターまで走った。
すると屈強な肉体を持つはずのギガンテック・ファイターは倒れ込み――片膝をついてどうにかその体を支えた。
ギガンテック・ファイター　ＡＴＫ３４００↓１７００
「まだです！私は手札から、装備魔法『斬機刀ナユタ』をマグマに装備！」
マグマが自身の剣を地面に突き刺すや否や、その剣を包むようにデータの炎が燃え上がる。

火柱のように燃え立つそれにマグマが腕を突っ込むと、勢いをつけて引き抜く。
そこにはより巨大で刺々しく、元の剣よりも圧倒的な力を秘めた片刃の大剣――斬機刀ナユタの姿があった。
「このカードはサイバース族モンスターにのみ装備できます。そしてバトルです！私はマグマでギガンテック・ファイターを攻撃！」
「くっ！」
「この瞬間、ナユタの効果を発動します！１ターンに１度、デッキから『斬機』モンスター１体を墓地に送ることで、そのモンスターの攻撃力分だけ装備モンスターの攻撃力を上げる！」
「なんだと!?」
マグマがナユタを構えると同時にその背後にマルチプライヤーの姿が現れた。
「私は『斬機マルチプライヤー』を墓地に送り、マグマの攻撃力をマルチプライヤーの攻撃力である５００アップします！」
マルチプライヤーの体がデータの炎へ溶け、ナユタの刀身へと吸い込まれる。同時にナユタの峰の部分に存在するブースターから放たれる炎が僅かにその勢いを増した。
炎斬機マグマ　ＡＴＫ２５００→３０００
「５００だけ…？今まで出てきた他の斬機モンスターでももっと高い攻撃力はいたのに

…」

久の呟きに、ハッとしたのは和と対峙する京太郎。

「…！つまり、目的はディヴィジョンのような墓地に送られた時の効果か！」

「その通りです！私は墓地に送られたマルチプライヤーの効果！このカードが墓地に送られた場合、フィールドのサイバース族モンスター1体の攻撃力をターン終了時まで倍にできます！」

「倍!?」

「ってことは…」

突如としてマグマの全身とナユタのブースターからとてつもない出力の炎が放たれ、その力を倍増される。

炎斬機マグマ　ＡＴＫ３０００→６０００

「攻撃力…６０００!?」

「これで終わりです！攻撃力６０００のマグマで攻撃力１７００のギガンテック・ファイターへ攻撃！」

マグマがギガンテック・ファイターへと跳躍し、大剣を振りかぶる。瞬間、ナユタからかつて無いパワーの炎が吹き出されその勢いを増した。

「その攻撃力の差は４３００…これが通れば…！」

「させるか！罠カード発動！『ガード・ブロック』！戦闘によって発生するダメージを０にして、カードを１枚ドローする！」

ギガンテック・ファイターが防御姿勢をとり、その両腕をクロスする。マグマの持ったナユタはそのままギガンテック・ファイターへ斬りかかり――一瞬の抵抗とともに両断した。

しかし、その一瞬の抵抗が功を奏したのか余波が京太郎へと届くことは無かった。

「でもギガンテック・ファイターは破壊させてもらいます！そしてマグマの効果発動！」

「何!?」

「マグマが相手モンスターを破壊した時、相手フィールドのカードを２枚まで対象として、破壊できます！ギガンテック・ファイターはこの時点で場にいないため破壊できませんが、召魔装着は破壊させていただきます！」

「くうっ！」

京太郎への余波は防げても、他への余波を防ぐには至らない。斬撃の攻撃により広がった炎はフィールドの中央の光を取り巻き、欠片も残さず燃やし尽くした。

「だが、ギガンテック・ファイターは自身の効果により蘇る！そして墓地から特殊召喚されたギガンテック・ファイターは全ての効果の影響をリセットされ、その攻撃力は３１００に戻る！」

フィールドに残った炎の残滓が突如として京太郎のフィールドに集まりはじめ、やがて人型へと形成されていく。

炎が弾け拡散すると、そこには高熱の体から蒸気を発するギガンテック・ファイターが存在していた。

「…防御札も用意していましたか、さすがですね。しかもギガンテック・ファイターの効果もあってほぼノーリスクでドローできるとコンボ性能も高い。本来は補給部隊も併せて2枚ドローできる算段だったのでしょう」

関心するように微笑む和は、チラリと京太郎のデュエルディスクの墓地置き場へと目を向ける。

「…すごいな、そこまで読んでたのか」

「補給部隊を捨てられた時、明らかなオーバーリアクションでしたから」

「あー…」

思えば京太郎は、事前にその効果を聞いていたにも関わらず手札を捨てられたことに驚いていた。それはおそらく効果に対する驚きではなく『補給部隊』を捨てられたことに対する驚きだったのだろう。

そして同時に、ギガンテック・ファイターの高い攻撃力と復活能力があるにも関わらず、防御カードであるガード・ブロックをデッキに積んでいることに和は注目していた。

「（彼のデッキ構成から、おそらくギガンテック・ファイターをシンクロ召喚する事に長けています。しかしギガンテック・ファイターが破られることも考慮に入っていたのなら、その次があるはずです！）」

「私はカードを1枚伏せて、ターンエンドです！」

「俺のターン、ドロー！…よし！俺は１０００のＬＰを払い、手札から『簡易融合（インスタント・フュージョン）』を発動！ＥＸからレベル５以下の融合モンスターを融合召喚する！」

須賀京太郎　ＬＰ４０００→３０００

「簡易融合!?」

驚きの声を上げたのは咲である。昨日デュエル部への入部手続きを行った後、京太郎の部屋へ行きデッキ構築を手伝った。

しかし、その時にあのカードは入っていなかったはず。とするなら、あれは素人のはずの京太郎が自分で判断して投入したカードということになる。

「簡易融合召喚（インスタントゆうごうしょうかん）！来い、レベル５！『炎の剣士』！」

「炎の剣士…？」

出現したのはデュエルモンスターズの初期も初期に登場した融合モンスター『炎の剣士』。確かに種族や攻撃力から投入されることも多い。

が、近年においては『召喚獣ライディーン』の方が攻撃力効果においても優先される傾向にある。和はそこに疑問を持った。

京太郎のデッキがエースモンスターを除き寄せ集めによって構築されたものだと知ったら和はひっくり返るだろう。

「これで終わりじゃない！俺は手札から魔法カード『置換融合』を発動！フィールドのモンスターを素材として融合召喚を行なう！」

「召喚条件はレベル５以上の戦士族２体！フィールドのギガンテック・ファイターと炎の剣士を融合！」

ギガンテック・ファイターと炎の剣士が黒い渦に呑み込まれ、圧縮される。

やがて渦は黒い球体となり、黒色の光が放たれた。

呼び出されるのは、彼から貰った２枚のうち、残る１枚。

「来い！レベル１０！『覇勝星イダテン』！」

現れたのは、三叉の槍と紫の鎧を纏った巨大な戦士。その名を覇勝星イダテン。

「…なるほど、ナユタの攻撃力上昇。そして墓地に送られた斬機の効果をも突破する方法としては最適解の１つです」

「イダテンの融合召喚時効果！デッキからレベル５の戦士族を１体手札に加える！俺は

『ターレット・ウォリアー』を手札に！」

和はそのカードを見て京太郎のデッキを分析する。

「（ターレット・ウォリアー…戦士族の攻撃力を底上げできる特殊召喚可能なレベル５戦士族モンスター。事故回避用の、そしておそらくギガンテック・ファイターやイダテンの素材としても有用なカード）」

「さらに俺は墓地から『置換融合』の効果を発動！墓地のこのカードを除外し、墓地の融合モンスターをＥＸデッキに戻し、デッキから１枚ドローする！俺は炎の戦士をＥＸデッキに戻す！さらにその後、１枚ドロー！」

「（さらに、簡易融合で呼び出し素材にしたモンスターをＥＸに戻しつつ手札を増やしました。これで須賀くんはイダテンを融合召喚しつつ、手札の枚数を減らしていません）」

和は脳内で京太郎の評価を上げる。

いささか運に頼った部分はあるが、そもそも多大に運が絡んだゲームである以上は許容範囲だ。それよりもそのデッキを十全に使いこなして見せている京太郎の構築力とタクティクスは初心者のそれではない。

「（天性の、とまでいうつもりはありませんがどうやら須賀くんはデュエリストとしての並々ならぬ才能を秘めているようですね）」

「バトルだ！俺はイダテンでマグマに攻撃！」

「俺は『覇勝星イダテン』の効果を発動!!ダメージ計算時、相手モンスターのレベルがイダテンのレベルより低い場合、その攻撃力を０にする!」

それは対レベル持ちモンスターとしては紛れも無く破格の性能である。レベルを持たないエクシーズやリンクに対してもその３０００からなる高いステータスは驚異になりうるし、そうでなくてもイダテンにはもうひとつの効果があった。

いずれにせよ、これでマグマの攻撃力は０になる。が、そう易々とやられる和ではなかった。

「装備されたナユタの効果を発動します!デッキから『　斬機』モンスター１体を墓地に送り、攻撃力分だけマグマの攻撃力を上昇する!」

「だがチェーンの処理順によりその攻撃力は０だ!」

「承知の上です!私は２体目のディヴィジョンを墓地に送り、その攻撃力である１５００を加え攻撃力を４０００に!」

「そしてその攻撃力は０になる!」

「ですが、墓地に送られたディヴィジョンの効果発動!このカードが墓地に送られた時、フィールドのモンスターを１体の攻撃力を半分にする!私はイダテンの攻撃力を半分の１５００にします!」

『炎斬機マグマ』　ＡＴＫ２５００→４０００→０

『覇勝星イダテン』ＡＴＫ３０００→１５００
「くっ、原村のＬＰは２６００！これじゃ削りきれない！」
原村和　２６００→１１００
度重なる攻撃力変動の応酬、その勝利を収めたのは原村和だった。
三叉槍によって赤白の鎧を貫いたイダテンだが、その一撃は倒される時に生じた炎の壁に阻まれ、衝撃を与えはしても和に届くには至らない。
ディヴィジョンの効果を用いて自身のライフを残すことに成功した原村和は、しかし意外と焦りを感じていたのか溜息をつく。
「…ふぅ、まさかそんなカードを持っていたとは。ですが破壊されたマグマと、対象を失い墓地に送られたナユタの効果を発動！」
持ち主が倒され地面に突き刺さったナユタから炎が吹き出し、その炎が和の掌の上に収束してカードとなる。
「まずナユタの効果！墓地からナユタ以外の『斬機』カードを手札に加えます！私はマルチプライヤーを手札に！」
「そしてマグマの効果！戦闘または効果で破壊された時、デッキから『斬機』魔法・罠１枚を手札に！私は魔法カード『斬機方程式（ざんきほうていしき）』を手札に加えます！」
デュエルディスクがデッキから自動的に排出したカードを手札に加え、和は京太郎を

見据える。
「…もう俺にできることはない。カードを1枚伏せて、ターンエンドだ」
「では、私のターン。ドロー!」
ドローによって手札を潤沢にした和は、静かに京太郎を見据える。
「正直、ここまでできるとは思っていませんでした。さらに磨けばきっと全国でも通用するデュエリストになれるかもしれません。」
それは、紛うことなき賛辞の意思。初心者であるはずの京太郎がインターミドルチャンプとここまで渡り合った。それは誰の目から見ても賞賛に値するものだった。
が、それでも和に勝つには遠く及ばない。
「ご褒美と言ってはなんですが、今の私の全力をお見せしましょう!私は墓地のシグマの効果発動!ＥＸモンスターゾーンに自分モンスターがいない時、このカードを特殊召喚します!」
再びシグマが墓地から炎を上げて甦る。
「更に私は手札から魔法カード『斬機方程式』を発動!自分の墓地の『斬機』モンスターの攻撃力を１０００アップして特殊召喚します!私は墓地のディヴィジョンを特殊召喚!」
ディヴィジョンがデータの渦から形を取り戻して蘇生される。

「…私は、手札から『斬機マルチプライヤー』を通常召喚！」
「私はレベル４のディヴィジョンとマルチプライヤーに、レベル４のシグマをチューニング！」
　シグマが光の輪となり２体のモンスターを取り囲み、シンクロのエフェクトが起動する。
「レベル１２のシンクロモンスター!?」
「紅蓮の刀携えし最終斬機士！その炎を統べし刀で敵を滅絶せよ!!シンクロ召喚！」
　空間をねじ曲げるかのような高熱のと閃光を纏った炎が周囲を飲み込む。その中心には、マグマをも超える最強の斬機士。
「レベル１２！『炎斬機ファイナルシグマ』！」
　炎そのものを刃としたかのような焔の刀を携え、佇む姿は一種の神聖さすら感じさせる。
「レベル１２…そのレベルを持つのはあらゆるモンスターの頂点とも言えるカード。それが和の切り札なのね」
「あれはのどちゃんが来たるべきキングとのデュエルのために用意した最強のカードだじぇ。あれを使うほど、のどちゃんのお眼鏡にかなったか」
「キング…？」

優希の言葉に疑問を持つ咲。キング、とは決闘王の事だろうか。ならば原村和はキングとのデュエルをした事がある？

「自身の効果で特殊召喚されたシグマは除外されます。ですが素材として墓地に送られたディヴィジョンとマルチプライヤーの効果発動！イダテンの攻撃力を半分にし、ファイナルシグマの攻撃力を倍に！」

『覇勝星イダテン』ＡＴＫ３０００→１５００

『炎斬機ファイナルシグマ』ＡＴＫ３０００→６０００

「攻撃力…６０００!?」

攻撃力６０００、それはあの五つ首の龍さえ凌駕する超ド級の領域。

「これで最後！手札から『斬機アディオン』の効果を発動！ファイナルシグマの攻撃力を１０００アップし、このカードを特殊召喚する！」

『炎斬機ファイナルシグマ』ＡＴＫ６０００→７０００

「な、７０００…！」

これを食らえばＬＰ３０００の京太郎であっても。否、例え万全なイダテンと無傷のＬＰがあっても耐えきれない。

「バトルです！『炎斬機ファイナルシグマ』で、イダテンに攻撃！」

「攻撃された時、罠カード『聖なるバリア―ミラーフォース―』を発動！相手の攻撃表示

モンスターを全て破壊する！」

京太郎は一縷の望みを賭けて伏せられた罠を発動する…が。原村和はそんなに甘くない。

「ファイナルシグマの効果！ＥＸモンスターゾーンに特殊召喚されたこのカードは、『斬機』以外のあらゆるカードの効果を受けない！」

「なんだって!?」

ファイナルシグマは放たれた光の奔流を刀の一太刀にて斬り捨てる。残されたのは、ただ守るもののないイダテンのみ。

「そしてファイナルシグマが相手モンスターとの戦闘で相手に与えるダメージは、倍になる！」

「ファイナルシグマの攻撃！一撃必殺（いちげきひっさつ）、紅蓮羅斬（ぐれんらざん）！」

須賀京太郎　ＬＰ３０００→０

ファイナルシグマの鋭い一太刀が、イダテンごとその後ろにいた京太郎を斬り裂く。倍の威力を持ったそれはＬＰにして実に１１０００もの強大な衝撃を伴い、京太郎を襲った。

炎のソリッドビジョンに巻かれる京太郎は、炎の中で思考する。

「（攻撃力７０００、そしてデュエリストへのダメージ倍増効果…。なるほど、あのドラ

ゴンを切り伏せてなお万全のＬＰを一撃で屠る超ド級のモンスター。これが原村和の領域なのか……！）」

戦いは終わり、デュエル終了のブザーが鳴り響いた。

「凄い、凄いよ京ちゃん！原村さん！」

「いやはや、驚いた。和の方はまあ予想よりかなり強かった程度の感想じゃが、京太郎の方は初心者があそこまで食らいつくとはのう。お主ほんとに初心者か？」

「でも、和の手加減あっての話だじぇ！私なら２ターンもあれば瞬殺だ！」

「いやー…予想外の掘り出し物ねぇ。こりゃ案外大会が始まる頃には団体戦レギュラーの座もあぶないかもよ？ね？片岡優希さん？」

「じぇっ!?」

デュエルが終わり次第、わいのわいのと集まって騒ぎ始める一同。

気づけば新聞部っぽい生徒は姿を消している。さっそく新聞作りだろうか、仕事熱心なことである。

ムクリと起き上がったらワイワイ囲まれてた京太郎は滅多に無い女子達の急接近に

しどろもどろである。軽薄に見えるがこう見えて初心なのでしかたない。
　それを見てクスクスと笑みをこぼす和。
「お疲れ様です、須賀くん。すごいソリッドビジョンだったでしょう？大丈夫ですか？」
「あ、ああ。しかしすごいな原村、あんなにデュエル強いなんて。流石はインターミドルチャンプだぜ」
「須賀くんも、私にあそこまで食らいつくとは思いませんでした。マグマ以降はわりと本気で倒しに行ってたんですよ？それと、私のことは和、で構いません」
「え、ああそうか？じゃあ和、俺の事も名前でいいよ」
「それはちょっと」
「なんで!?」
　まさかの拒否に狼狽えを隠せない京太郎。それをみてまた笑みを零す和。その目はしっかりと京太郎を観察していた。
「（これは…もしかすると、本当にあのキングへのリベンジが叶うかもしれませんね）」
　和の心は、外からは欠片もわからないながらも、たしかに強くリベンジに燃えていた。
「（待っていてください、逆巻遊陣。必ず私が貴方を打ち倒してみせます！）」

６２０：清澄学園名無し部　２０ＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　１８：０６：００　ＩＤ：ＹＮＩ６Ｅｎｋｋｕ
はえー新入部員すっごい…あの原村和と互角に渡り合ったってさ

６２２：清澄学園名無し部　２０ＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　１８：０７：２３　ＩＤ：ｇｏＰｍｔｘ４ｎｌ
これマジ？
初心者って聞いたんだけど

６２３：清澄学園名無し部　２０ＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　１８：０８：５０　ＩＤ：ＴＸｘＣｆＲＥ＋８
２人の最終エースっぽいのはさすがに伏せられてるな
でも自分のエースを両者１ターンで召喚するってんだからレベル高ぇわ

６２５：清澄学園名無し部　２０ＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　１８：１０：２２　ＩＤ：ｙｎｂｆｇ５ｌＵｐ

そんな…俺なんてリクルーター使って2、3ターンかかるのに…

626：清澄学園名無し部　20XX／XX／XX　18：11：49　ID：fV+UPbeTN

>>625　遅すぎる…

627：清澄学園名無し部　20XX／XX／XX　18：13：21　ID：LrENDus3n

待って魔装戦士ってそんな強かったの

ストレージ常連のイメージしかなかったんだけど

628：清澄学園名無し部　20XX／XX／XX　18：14：59　ID：4bBcBdrse

フィールド魔法のパワーはかなり強いからね

フィールド魔法引けばそら回せるよ

630：清澄学園名無し部　20XX／XX／XX　18：16：37　ID：mly

Ｃｓ７ＲＨｅ
テラ・フォーミングそこそこ高いんだよなぁ
小遣いじゃちょっと手伸ばすのは躊躇われるぜ

６３２：清澄学園名無し部　２０ＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　１８：１８：１６　ＩＤ：ｊＡＯＳＨＵＧＮＯ
原村和は相変わらず斬機か
アレ強いのにどうやってエースのマグマ突破したんだよ

６３４：清澄学園名無し部　２０ＸＸ／ＸＸ／ＸＸ　１８：１９：４１　ＩＤ：ｖｘ８１８ＺＥｍｋ
そら打点上げまくってじゃないかな
斬機超える打点とかどう出すのかイマイチ浮かばんけど

６３６：清澄学園名無し部　２０１９／ＸＸ／ＸＸ　１８：２１：２１　ＩＤ：８.ｊｆａＭｓｃｎ４
噂ではベンケイワンキルの使い手だとかなんとか

６３９：清澄学園名無し部　２０１９／ＸＸ／ＸＸ　１８：２３：００　ＩＤ：ＷＲＹＤｋｗＶｃ４
　＞＞６３６　だからあいつのエースはギガンテック・ファイターだっつってんだろ!?
６４０：清澄学園名無し部　２０１９／ＸＸ／ＸＸ　１８：２４：３７　ＩＤ：Ｃ７ｙｃ＋ｍｂ６Ｌ
　＞＞６３６　ギガンテック・ベンケイ…完成していたのか
６４１：清澄学園名無し部　２０１９／ＸＸ／ＸＸ　１８：２６：０４　ＩＤ：ｊＥＸＱｓ７ｍｎＷ
　相手にアームズ・エイド装備させてキガンテック・ファイターの連続自爆特攻だ。俺は詳しいんだ
６４３：清澄学園名無し部　２０１９／ＸＸ／ＸＸ　１８：２７：４１　ＩＤ：ｈＰａ４ＫｗＣ９０
　＞＞６４１　できないんだよなぁ…